
光と影 ～寄生する者～

崎浜秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と影　～寄生する者～

【Nコード】

N4692B

【作者名】

崎浜秀

【あらすじ】

眩い光から闇を照らし、その光を浴び影が生まれた。闇に住まう影は、生物に寄生し、心を喰らう。そんな影と戦う少女・飛鳥。彼女は自分に寄生する光に、苦しみながら、今日も影と戦い続ける。

闇の中に住まう者。彼らを人は“影”と呼ぶ。影は生物の心の中に寄生し、心の闇を喰らい成長する。そして、完全に成長を遂げた影は、その人の体を破りその亡骸をも喰らう。

そんな“影”に対抗する者“光”^{こう}。彼らは光りより生まれ、光りの中に住まう者。彼ら光も、影と同じく生物に寄生する。だが、それは影と戦う為の最善の方法で、彼等は寄生した生物に力と知恵を授け、それと同時に寄生された者は不老となる。

そして、光に寄生された一人の少女の影との戦いが始まるうとしていた。

「ハア…ハア……。今日こそは……追いついてみせるぞ！」

学生服の少年が一人、自転車にまたがり息を整える。顔立ちは男前の少年は額から流れる汗を右手で拭い、サラサラの黒髪を掻き揚げる。ここは車の交通が少ない複雑な路地。そんな中でも、結構広い路地で少年は誰かを待つ様に時計を気にする。

まだ肌寒く、桜の花弁がまだ舞っている時期。彼は彼女と出会った。美しい程艶のある漆黒の長い髪は腰まで届き、日差しを浴び輝いていた。その姿を見た瞬間、少年は天使が舞い降りてきたかと思った。

「来た！」

少年はそう叫び自転車のペダルを踏み込んだ。その視線の先には、先程路地から曲がってきた長い黒髪を靡かせる少女の姿があった。制服姿に、背中には布に包まれた細長いモノを背負っている。飛ぶ

様に地を駆ける少女に、少年は全速力でペダルを踏み、追いつく。そして、少女の方に顔を向け、「ニシシ」と、笑みを零す。が、少女が前方を軽く指差し「前」と、小さな声で言う。少年はその声に顔を前に向ける。と、同時に少女は体を右に捻り角を曲がる。それに、反応できず直進する少年の自転車の前輪が、ガードレールに衝突する。「へっ？」と、変な声を上げた少年は、凄まじい衝撃と自転車と共に宙に投げ出される。

「又オオオオツ！ 空を飛んでる！」

宙に投げ出された少年がそう叫ぶと、少女は腕組みをしながら冷やかな視線を送り、小さな声でばやく。

「飛んでるんじゃないくて、今から落ちるのよ」

「ふへっ？」

ガクンと、自転車と体が急に落下する。少女の言う通り。そして、水飛沫を上げる音が聞こえ、「つめてえー！」と、少年の悲鳴が聞こえた。呆れた様な表情を見せる少女は、ガードレール越しにまだ冷たい川に浸かる少年を見下ろす。そして、ガクリと肩を落としため息を漏らした。

「はふっつ。さびい」

自転車を脇に抱え川から上がってくる少年。制服はビショビショで、ズボンの裾から水が大量に流れ出る。衣服が水を吸った為、体が聊か重く動きが鈍い少年は、ガードレールの向こう側に立つ少女を見て叫ぶ。

「酷いじゃないか！ 飛鳥！ もう少し早めに忠告しろよ！」

「余所見してる涼助が悪い」

腕組みをしながら、当然だと言わんばかりの態度の飛鳥は、ため息を漏らし右手を差し出す。「おっ」と、驚いた様な声を出す涼助は、右手を伸ばし飛鳥の手を取ろうとしたが、「汚いから手貸すのやめる」と、飛鳥が手を引いたため、涼助はバランスを崩し川へと転落した。

水飛沫がもう一度上がり、「あーすーかー！」と、怒りの籠った涼助の声が聞こえてきた。そんな涼助を、見下ろす飛鳥の眼は、汚いものを見る様な眼だった。その冷ややかな眼差しに、一瞬怯む涼助は、「な、何だよ」と、弱々しく言い放ち、それに対し飛鳥は「風邪ひくわよ」と、一言。

もう一度、一から自転車を担ぎ川から上がってくる涼助は、口をモゴモゴと動かし飛鳥には聞こえない程度で声で愚痴を呟く。

「何、ブツブツ言ってるの？」

「別にいゝ」

ふてぶてしくそう言う涼助はガードレールを越えて自転車の横に立つ。ズボンの裾からは水が流れ、足元は水浸しになっている。風が吹き、濡れた体には聊か厳しい寒さだった。その寒さに身を震わせながら、涼助は飛鳥を見据える。そんな涼助に冷たい視線を送り不満そうに口を開く。

「あんたも、毎日懲りないわね。あんな怖い想いしたのに」

「だ、だから、俺は飛鳥の役にたちたくて！」

「居るだけ足手まとい」

「ひどっ！ そりゃ、酷すぎやしませんか？ 俺は……」

そう言い掛けた涼助は、飛鳥が歩き出したのに気付き、自転車を

押しながらその隣に並ぶ。特に涼助の事を気にする訳でもなく、飛鳥は歩みを止めず歩き続ける。ピチャピチャと足音を起てる涼助は、「ふえ……フェックシュン!」と、大きくしゃみをする。だが、飛鳥は更に歩みを速めた。

「ちょ、な、何で歩み速める訳!」

「風邪。ひきたくないし、ずぶ濡れの人と歩くのも嫌だ」

「待たんかい! 全部あんたが悪いんだろが!」

そう叫んだ涼助に、「自業自得」と、小さく呟く飛鳥は更に歩みを速める。それに追い付こうと、歩みを速め様とした涼助は、自転車ごと派手にすっころんだ。それには流石の飛鳥も立ち止まり振り替える。自転車の下敷きとなる涼助は「あうっ」と、変な声を上げながら飛鳥に助けを求めている。

「あんた……。それで、私の役にたつと思ってる? 影は、そんなに甘い相手じゃないの。光を寄生されてないあなたじゃ役不足よ」

「け、けど、何か俺にも出来る事がある!」

「無いわ。そんなの。それに、これ以上私に関わると、本当に危険よ。影は光を寄生させた私に関わった者を襲う危険性もあるんだから」

その言葉に表情を明るくし勝ち誇った様な笑みを浮かべる涼助は、体に乗る自転車を軽々と退けて立ち上がる。その妙な勝ち誇った笑みに、飛鳥は「キモチワル」と、呟いた。言葉を失い眉間にシワを寄せる涼助は、渋い表情を見せつつ言う。

「光を寄生された奴と関わった俺は、すでに影に狙われる可能性があるんだろ? それなら、飛鳥と一緒にいた方が安全じゃん」

それを聞くなり、目を細める飛鳥は、やってしまったと、言いたそうに右手で額を押さえた。

渋々と涼助に着いて来る事を許可する飛鳥だが、その表情は不服そうでめんどくさそうにため息を吐く。全くそんな事には気付いていない涼助は、嬉しそうに笑みをこぼしていた。

「なあなあ。それで、あの影って言うのは、一体何なんだ？ 詳しく教えてくれよ」

「別に、あなたが知る必要はないわ」

「んだよ。冷たいな。少しくらい教えてくれたっていいだろ？ 俺も協力するんだし」

「……そうね。少しなら」
「やった！」

嬉しそうに拳を握る涼助だったが、その喜びとは裏腹に冷たい言葉が返ってきた。

「影は私の敵。それだけ」

「んなつ！ それだけって！」

「これ以上、あなたが知る必要は無い」

「何だよ！ 教えてくれるって言ったじゃんか！」

「少しならって言ったわ」

当然の返答に口籠る涼助。反論のしようが無かった。それに、口では飛鳥に勝てないと分かっていた為、これ以上何もいえなかった。言えばもつと酷い事を言われるだろうから。

急に大人しくなり、黙って後ろから着いて来る涼助を、多少気にしながら歩みを進める飛鳥は振り向かぬまま口を開く。

「あなた、どうして私の力になりたいと思ったの？」

「エツ？ な、な、何だよ！ いきなり」

いきなりの質問に焦る涼助は、慌てたのか自転車を横転させた。呆れた様のため息を漏らす飛鳥は振り返り、「何してるの？」と聞く。「何でもねえ！」と、乱暴な口調になる涼助は微かに頬を赤く染めていた。何をそんなに怒っているのか分からない飛鳥は首を傾げる。倒れた自転車を立て直し飛鳥を追い越し先を急ぐ。

「ねえ。さっきの質問の答えは？」

「い、いいだろ。別に理由なんて」

「まあ、そうだけど……。普通、自分から危険な目に会いたいとは思わないわよ」

「飛鳥だって、自分から危険な所に行くんだろ？」

その言葉に俯く飛鳥は、「私は……」と呟き表情を曇らせる。その表情を見た瞬間、涼助は罪悪感を感じ言葉を呑んだ。飛鳥だって望んで危ない目に会ってる訳じゃない。と、この時涼助は感じた。全ては、自分の中に光が寄生しているから戦わないといけないのだと。

そう思うと、なぜか飛鳥が可哀想に思えた。自分と同じ歳位なのに、そんな危険な目に会わなきゃいけないのだから。飛鳥と一緒に暗い表情になる涼助は、チラッと飛鳥の方を見る。やはり浮かない顔だ。申し訳ないと思うが、中々言葉にする事が出来ない。すると、飛鳥が涼助の口を塞ぎ、壁に体を押し付けた。

突然の事に頭の中が真っ白になり、戸惑う涼助の耳元で飛鳥がささやく。

「シート！ 騒がないで」

「ムムムムッ！」

「黙ってて！ 奴に寄生された奴を見つけた」

「ムツ……ムムムツ？」

口を塞がれ何を言っているのか分からないが、飛鳥は何度か頷いた。電柱と壁の合間から向こう側に人が居るのが見える。右腕に妙な刺青を入れた男で、明らかに悪そうな顔つきだ。その男は脇に若い女を連れ、どこかに向っている様だった。

ゆっくりと涼助の口から手を放し、そつと男の方に目を向ける。ようやく、開放された口を、涼助は開いた。

「あいつに、影が寄生してるのか？」

「そうよ。でも、あれは本体じゃない。きっと、どこかで本体に合流するはず」

「本体ってどう言う事だ？」

「影は光と違って、分離し他人にも寄生するのよ。もちろん、本体を倒せばそいつから寄生された奴は元に戻るけど……」

「……けど？」

オウム返しの様に聞き返す。複雑そうな表情を見せる飛鳥に、涼助は不安になる。だが、そんな涼助の不安も、飛鳥の見せた笑みによってかき消された。

「ううん。なんでもないわ。それより、ここからは着いてきちや駄目よ！」

「何で？」

「危険だからに決まってるでしょ？ 分かった？」

薄らと青筋が額に見えた。その為、「わ、わかった」と、苦笑しながら涼助は言った。これ以上逆らえば何をされるか分からない。だから、そう言わざる得なかった。それに、泥臭くベタベタした服を早く着替えたかった。

飛鳥と別れた涼助は、自宅に向って自転車を押していた。チェー
ンがキーキーと軋み、人とすれ違う度に変な目で見られた。その痛
い視線に涼助は歩みを早くした。

「くうくう。全ては飛鳥のせいだ……」

一人そんな事をボヤキ、ため息を漏らす。肩を落としていた涼助
は、不意に横を通り過ぎた人の腕に目がいく。その腕には先程の男
と同じ刺青が彫ってあった。直感だが、涼助は思う。こいつも影に
寄生されていると。

その瞬間、いてもたってもいられなく、自然と足は刺青を彫って
ある男の後を着けていた。

その頃、飛鳥は男を見失っていた。幾度か角を曲がり、人通りの
多い所に出た為、完全に人ごみに消えてしまった。キヨロキ
ヨロと辺りを見回す飛鳥は、ため息を漏らし独り言の様にブツクサ
と呟く。

「人を隠すなら人の中とは、よく言うものね」

飛鳥の頭の中に年老いた声が流れ込んだ。

『そんな事を言っている暇があったら、さっさと奴を探せ』

その頭の中に響いた声に、不満そうな表情を見せる飛鳥は眉間に
シワを寄せ、右手の人差し指で米神を押す。何だかイライラとして
しまった。涼助と一緒にいた時は、全く感じなかったのに。この声
が聞こえたと同時に、無性にイライラとしてしまった。

『どうした？ 飛鳥。早く探せ』

「うるさい……。私に指図しないで……」

眉間にシワを寄せたまま俯きそう呟く。頭痛がする。体が震える。吐き気がする。自分の心の中を見透かされている様で、気持ち悪い。その感覚に蹲る飛鳥は、少々息を荒げ右手で更に米神を強く押す。そんな飛鳥を心配したのか、一人の若い男が声を掛ける。

「だ、大丈夫かい？」

心配して声を掛けた若い男に、飛鳥は怖い顔を見せ怒鳴る。

「うるさい！ 私に構わないで！」

「う、ごめん」

若い男は心配そうな表情をしながら、仲間のもとに戻る。するとその内の一人が、「だから、関わらない方がいいって、言ったんだ」と、言うのが飛鳥の耳にも届いた。だが、飛鳥が言った言葉は、若い男に言った言葉ではない。頭の中に流れ込む声に対する言葉だった。周りに集まった人々は、そんな飛鳥を変な目で見る。もちろん、ヒソヒソと何か言っているのも聞こえた。

「クツ……。お願い……。もう……。黙って……」

『フツ……。なら、早く奴を探せ』

「わ、分かった……。だから……。消えて」

『良かるう。必要な時に出て来よう』

声がプツンと消えた。その途端、頭痛も吐き気も無くなった。ただ、体の震えだけは止まらない。背筋がゾツとする。自分の中に自分以外の誰かがいると考えると。

それから、数分後ようやく体の震えが止まり、飛鳥は静かに立ち上がる。周りの目は全く気にならない。ただ、ヒソヒソと何か言っているのが多少イライラとする。目を閉じ息を整え、歩き出す。冷たい視線を背に受けて。

薄暗いクラブハウス。広々とした空間に、高級なソファやテーブルが並ぶ。そんな内装のクラブハウスに、数人の影が見える。その男達の腕には、あの刺青が彫られていた。その内の一人は、飛鳥が見失った男で、その隣りには涼助が追い掛けていた男がいた。そして、男の足の下に、傷だらけの涼助が横たわっていた。

「何のマネだ？ コソコソと」

ソファに堂々と座る一人の男。金髪に染めた短い髪に、下唇に煌く小さなピアスが二つ。この薄暗い中でも分かるギラギラと鋭い目付き。そして、あの刺青が右目の上の方に彫られていた。

「それで、何のマネ？ 教えてくれないか？」

「うぐっ……。うるせえ……。教えるわけ無いだろ……」

「そっ……。なら、直接影を送り込んでから聞こうかな」

「んなっ！」

涼助の頭の上に、男の右手が置かれる。と、同時に頭の中に何か流れ込み、激痛が涼助の体を襲った。

「ぐあああああっ！」

苦痛に叫び声をあげる涼助を見て、周りの男達は不気味な笑みを見せていた。

一人街を彷徨う飛鳥。人通りも多く、店も多く並ぶ。その道の真ん中を歩む飛鳥は、何度か人とぶつかった。それでも、謝らずひたすら進み続ける。あの男を捜して。しかし、こう人が多いと見つかる事が出来ない。

悪戦苦闘する飛鳥だが、その視界に見覚えのある顔を見かけ動きを止める。そして、その男を追いかけた。なぜ、こんな所にいるのだと、そう言う思いと、何か嫌な予感が胸をざわめかせる。

「涼助！」

人気の無い裏路地に曲がってすぐ、飛鳥はそう叫ぶ。すると、目の前を歩む男が足を止め振り返る。その顔はやはり涼助だ。だが、どこかいつもと違う。表情と言うか、雰囲気が大分違う。一瞬戸惑った飛鳥だったが、その違和感にハツとして涼助に問いかける。

「あなた、まさか……」

「フハハハッ。そいつは、お前の知り合いか？」

涼助の背後から男の濁った声が聞こえる。涼助はゆっくりと壁に背を向け、軽く会釈する。すると、靴の踵が乾いた地面を叩く音が近づく。背負った布に包まったものを右手にとり、左手に持ち替えた飛鳥は、目付きを鋭くし、路地の向こうを真っ直ぐ睨む。

「そんなに、怖い顔してさ。綺麗な顔が台無しだ」

「うるさい！ 涼助に何をした！」

布の中から、美しい形の柄があらわになる。薄暗い路地の向こうから現れた男は、下唇に二つのピアスをつけた男だった。その男が

ら放たれる影の力に、飛鳥は表情をこわばらす。すでに、影は男の中で目を覚まそうとしていたからだ。

柄を握り締める飛鳥は、男を真っ直ぐに睨み鞘を握る左手の親指で、鐔を静かに押し上げる。それでも、全く余裕の男に飛鳥は、何か見落としている事があるのではないかと思う。だが、冷静に相手を分析している余裕は無かった。早く涼助を助けたい。これだけが、飛鳥の頭に過っていた。

「随分と、怖い目をしてるねえ。もしかして、怒ってる？」

「関係ない。影は私の敵」

「ふゝん。関係ないねえ……」

「斬る！」

細い路地を走る飛鳥は、素早く刀を抜き男に向っていく。そして、刀を振り上げたと、同時に飛鳥の足が止まる。

「あらあら？ どうしました？ こいつ、あんたと無関係でしょ？ それなら、そのまま斬っちゃえば？」

男と飛鳥の間に涼助が割って入っていた。その為、飛鳥は奥歯を噛み締め、表情を強張らす。そして、男の顔を鋭い目付きで睨む。だが、男はニヤニヤと笑みを浮かべながら、飛鳥の顔を見据えていた。

「あなた、自分で戦う気は無いの？」

飛鳥のその言葉に、笑いを噴出す男。

「ブハハハハッ！ 何を、馬鹿馬鹿しい！ 使える奴は使ったよ」

「クッ！」

歯を食い縛り、怒りを滲ませる飛鳥を、馬鹿にする様に笑う男は指をパチンと鳴らす。すると、飛鳥の背後から複数の足音が聞こえる。きつと、この男の影が操っている人たちだ。涼助と同じ様に。

刀を振り上げたままの飛鳥は、背後に迫る足音を聞きながら静かに俯く。男の笑い声に奥歯を軋ませ、刀を捻り涼助の首筋を峰で殴りつける。その瞬間、男の表情が変わり、飛鳥の後ろに迫る仲間に何度か合図を送る。だが、それより早く、飛鳥が間合いを詰める。

「残念ね。所詮、光と同じ。自分じゃ何も出来ないのよ。あなたは！」

「や、やめ——」

叫び声が悲鳴に変わる。声にならない程の悲鳴に。

刀は真っ直ぐに男の胸を貫き、切っ先が背中から突き出ていた。体を震わせる男は、かすれ声で呟く。

「残念……。もう……。手遅れだ。俺は……。この体から……。開放される！」

「——！」

男の背中から黒い煙が吹き出る。それと同時に、男の体は砂と化し崩れ落ちる。そして、吹き出た黒煙がまとまり、形を成形する。

「チッ！」と、小さく舌打ちする飛鳥は、横たわる涼助を左手に抱えると、地を蹴り空高く舞う。そして、ビルの屋上へと着地する。

乱暴に地面に落とされた涼助は、その痛さに目を覚まし朦朧とする意識の中で飛鳥の方を見る。刀を構えたままの飛鳥は、涼助に背を向けたまま叫ぶ。

「涼助！ 私の後ろから離れないでよ！」

「離れるなつて……。まだ、視界が……」

グラグラと歪んだ視界の中で、何とか飛鳥の背中を見つけた涼助はそう叫ぶ。その涼助の視界に黒い影が映る。それは、飛鳥よりも遙かに大きい生物だった。この光景を、以前にも涼助は見た。それは、初めて飛鳥と会った時。あの日も、確かこんな風に飛鳥が涼助の前に立ち、必死にあの大きな化物と戦っていた。

「グハハハッ！ 残念だったな。あと少し早ければ俺を完全体に出来なかったのに」

「関係ない。あんたが、完全体になった所で、変わりはない。私は影を倒し、光を消す」

巨体を揺らす黒い影。額に三本の角、肩から鋭利な刃が二本突き出て、大きな口からは牙が抜き出ている。そして、唯一白いギラツク目が二つ飛鳥を見据える。恐ろしい影の姿に、臆する事無く飛鳥は鋭く睨みつけた。大きな拳を振り上げる影は、飛鳥に向って拳を突き出す。

飛鳥はそれを容易くかわす事が出来た。だが、それを飛鳥はかわさず、刀で受け止める。

「クッ！」

衝撃が刀を伝い飛鳥の両腕に押し掛かる。そして、それは全身へと行き届き、体は悠々と宙に舞う。宙に投げ出された飛鳥に、影は追い討ちをかける様に大きな手の平を振り下ろす。手の平は飛鳥を地面へと叩きつける。

「ウクッ！」

奥歯を噛み締めながらも、飛鳥は口から血を吐く。

「飛鳥！」

ようやく意識が安定してきた涼助は、大声で叫ぶ。だが、それに反応は無い。

「グハハハハッ！ 脆いな！」

影は巨体を揺らし飛鳥へと近付く。ボロボロで立つ事の出来ない飛鳥を、涼助は守りたかった。そして、そう思った時、自然と涼助は飛鳥の前へと立っていた。

「やめろ！」

「何だ？ 力なき人間。この俺に逆らうのか？」

「黙れ！ お、お前なんか！」

「消えろ」

影は右手で涼助の体を叩く。軽々と吹き飛ぶ涼助の体は、地を滑りフェンスにぶつかり勢いが止まる。その涼助の姿を薄れ行く視界の中に見た飛鳥に、頭の中に声がする。

『どうした？ 力を貸してほしいのだから？』

「うる……さい……」

掠れた声でそう呟く飛鳥に、もう一度頭に声が流れ込む。

『今のお前では、影に傷を負わす事も出来ん』

「うるさ……い」

徐々に視界がはつきりする。そして、胸の奥から力がわく。

『諦めて、力を求めろ』

「うるさい！ 誰がお前の力など！」

そう叫ぶ飛鳥は刀の柄を握り締めると、静かに立ち上がり目の前に佇む影を見上げる。口角から血を流し、苦しそうに呼吸をする飛鳥。その姿を見た涼助は、微かに笑みを浮かべた。涼助には見えていたのだ、飛鳥が影を倒すその瞬間が。

「グハハハッ！ 死に底無いめ！ これで、楽になれ！」

振り上げた拳を勢いよく振り下ろす。が、今までと違う鋭い眼光を見せる飛鳥は、素早く刀を振り上げる。影の大きな拳が、刃に触れる。衝撃が飛鳥の全身を襲うが、それと同時に刃が影の拳を裂く手応えを感じる。

「ぐあああああつ！」

「これで、終わり」

素早く振り上げた刀を構えなおし、地を蹴る。拳が二つに裂けた影は、その苦痛に苦しみつつも、何とかもつ一方の拳を飛鳥に突き出す。だが、飛鳥はその拳を軽々とかわし、そのまま頭から真つ二つに引き裂いた。

悲鳴は収まり、巨体が地に倒れる。血などは流れない。影には元々血が通っていないから。そのまま引き裂かれた影は、微粒子となり風に吹かれて消えていった。

夕日が見える公園のベンチ。飛鳥の膝の上には傷ついた涼助の顔があった。額には濡れたタオルが置かれ、飛鳥の右手がそのタオルの上に優しく添えられている。夕日色に染まる空を、見据える飛鳥はふと視線を感じ、顔を下に向ける。すると、涼助と視線がぶつかった。その瞬間、苦笑する涼助は、「よっ」と、小さな声で言う。そんな涼助を、眉間にシワ寄せながら見る飛鳥は、静かに問う。

「いつから、起きてた？」

「十分程前から」

「ふっん。十分前から……」

静かにそう呟く飛鳥の額には薄らと青筋が浮かんでいた。苦笑する涼助は、表情を引き攣らせ静かに体を起き上がらせる。そして、涼助はボソツと呟く。

「もう少し、優しくしろよ。こっちは怪我人なんだからさ」

その言葉にムスツとした表情を見せる飛鳥は、不服そうに呟く。

「あなたが、影になんて操られなきゃ、お互い怪我なんてしなくてすんだのよ。大体、あなたは、私が言っただ事を聞いてなかったの？」

「何だよ。飛鳥が言っただ事って？」

「危険だから近付くなっって、言わなかった？」

「……」

腕組みをして考え込む涼助。記憶を辿ってみるが、飛鳥にそんな事を言われた覚えが無い。その為、笑みを浮かべながら、「そんな事言われてない」と、答えた。その瞬間、清い澄んだ鉄音が聞こえ、飛鳥の手元で刀がチラリと刃を輝かせていた。そして、押し殺した様な声で飛鳥はもう一度問う。

「言つたよねえ？」

半ば脅し気味の飛鳥に、渋々と「言いました」と、呟く。すると、刀を布に包んで横に置き、落ち着いた口調で言う。

「それで、何であんな事したの？」

「あんな事？ それは、あいつらを追い掛けた事？ それとも、影の前に飛び出した事？」

のん気な口調の涼助に、ため息を吐く飛鳥は、「両方よ」と、呟いた。正直、分からなかった。涼助が、自分の命を顧みず、あんな行動をした理由を。

飄々（ひょうひょう）とした表情をする涼助は、笑みを浮かべ何の躊躇いも無く言う。

「だって、好きな奴の力になりたいじゃないか」

その言葉に暫し、その場に沈黙が続く。キョトンとした表情を見せる飛鳥は、呆れた表情を見せ答える。

「いきなり告白？」

馬鹿にした様な口調の飛鳥に、赤面しながら慌てた口調で涼助は騒ぐ。

「な、何だよ！ いいだろ！ す、好きなものは好きなんだから」

「そう。それで？」

「そ、それでつて！ あっ！ おい！ 待てよ！ 返事聞かせろ！」

飛鳥は涼助の声を無視してベンチから立ち上がると、スタスタと歩き出す。首筋がまだ痛む涼助は、フラフラと立ち上がりヨロヨロと飛鳥を追い掛けた。そんな飛鳥の口元は綻び、嬉しそうな笑みが浮かんでいた。

（後書き）

久し振りの短編小説です。如何でしたか？

まあ、ラストの方は聊か強引克、投げやりな感じが漂いますが…

…。んまゝ、まとめるのが下手くそです。

あと、表現とかも同じ言葉ばかり……。技術の無さが浮き彫りとなつた形になっています。

それから、読者の方にお願ひがあります。是非、読んだ際には感想を聞かせてください。評価とかはいらないんで、感想だけでも聞かせてもらえれば……。嬉しいです。

それでは、またどこかで……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4692b/>

光と影 ～寄生する者～

2010年10月10日07時58分発行